

扇山から百蔵山

4月19日土曜日早朝、早めの時刻に仕掛けておいた目覚まし時計が鳴って眼が覚めた。アラーム音を止めると次の目覚まし時計が鳴るまでもう一眠り、と再び布団に戻った。すると外の自動車の走る音に水しぶきの音が混じっているのに気づいた。雨?ぼくはとっさに窓を開き外の様子をうかがった。まだ闇い。4階の窓から見下ろすと、アスファルト道は濡れて水たまりがいくつかできており、反射される街灯の明りが、雨滴を受けて揺れている。「このぶんだと山は中止だな」そう思うとぼくは二つ目の時計のアラームを解除してゆっくり眠なおすことにした。

今回の山烹(さんぽう)会の登山は早くも5回目であり、4月1日夕に丸ノ内の「東宝ディンドン」で開かれた月例会で、石田氏により扇山の提案がありすぐそれに決定した。しかし常連で鍋師の山本氏が4月と5月は不都合で参加できないこととなったので、山頂での鍋料理が危ぶまれ、さみしい登山となりそうであった。登山歴の深い石田氏と山本氏とをメンバーとして有する山烹会は初心者でも四季を通して安心して参加できる登山クラブとして注目を集めてきているが、もうつの魅力は山での鍋を囲んだ昼食会である。ぼくはなんとか鍋はやりたいと考えていたのでLLサイズのチタン鍋を持参することとしてザックに詰めておいた。しかし登山の帰りには新宿のカルチャーセンターでリコーダーアンサンブルのレッスンもあるのでアルトとソプラノのリコーダーも押し込み、さらに二つのプリムスバーナーと二つのガス缶とでザックはいびつにふくらみはちきれそうであった。

次に目が覚めたのは携帯電話のビープ音であった。登山中止の連絡だろうと思って出て見ると、向山氏からであった。彼は台湾出身で、母国では高度の登山を経験してきた山岳愛好家であるが山装備をすべて国に残してきたので、こちらでは現在ハイキング程度の活動しかできず、特に雪道に不備のため前回の川苔山は遠慮してもらった。しかし雪解けとともに解禁となった。彼は本多氏に登山の中止の確認を求める電話を入れたところ、本多氏は登山を決行することにしているということだった、そしてぼくはどうするつもりかを問い合わせてきたのだ。行かないつもりでいたぼくは、あわてて石田氏の意向を問おうとしたが彼の電話番号を聞くのを忘れていた。そこで本多氏に電話を入れるとだれも出なかった。おそらくすでに家を出たのであろう。ぼくは向山氏に電話し、本多氏は出発したらしい、しかたないからぼくらも行こう、と彼を誘った。あとで聞いた話だと、まず石田氏が本多氏に電話を入れて、中止にしましょう、と促したが、本多氏は「なぜですか、行きましょう」と言い返し、これにベテランの石田氏も山男のプライドを刺激されて「うぬ」と唸ったという。

ここ一二年の本多氏の山に対する情熱は尋常でない。高校生のとき穂高あたりを登って以来彼は山と縁を切った。山のみか自然界から彼は自らを隔離して都会にとじこもった。どのような理由があってそうしたのかは彼は話そうとしないが、ちょうど思春期に異性につらい仕打ちを受けた少年が、その後一切異性を拒み続けるように、本多氏も山を見ないで青春期・青年期を過ごした。しかし彼があくせくした人生に疲れ、老後の自分を想像したとき、彼はとたんに居酒屋のマスターとなっている自分を見た。そしてそこで酒を飲んでいる客たちは会社の上司や同僚の悪口を言っているのではなく、愉快に山の話をしていたのだ。このときから彼は再び山に視線を戻した。しかし皮肉にもそれは体力が衰えを見せ始める40歳半ばであった。彼はかつて山に残してきた若き自分を捜索してでもいるかのように急き立てられて山を貪り始めた。登山学校にも参加して毎月実地訓練を受けている。

ぼく自身30代半ばでアウトドア活動に目覚め、その後10年くらい貪るように各地をサイクリング旅行したことがあるので彼の気持ちがよくわかる。

約束の鳥沢駅に着くと、雨はやんでいた。プラットフォームの階段の上で向山氏に会い、駅の外では石田氏と本多氏とがぼくらを待っていた。本多氏が若き谷口氏に電話すると寝過ごしたということで、参加者は4名である。タクシーで梨の木平にゆき、ここから扇山登山が開始される。 9時35分。

霧の中をしばらく登ると水場があった。ここで休憩していると一度追い越した6人くらいの婦人の一行に追い付かれた。ぼくらは写真のシャッターを押してもらった。会話がはずんだ。石田氏が応対した人は昨日もここを登ったのだと言ったそうな。彼女らの会話はやがて妙に好色的な傾向を帯びてきたのでぼくらは急いで荷をまとめ出発した。しかし植物などの写真を撮っていた向山氏がつかまり、「奥さんのほうがやっぱりええか」などとしばらくひやかされていた。ぼくらは不安になって足を止め、彼が上がってくるのを見守ったが、やがて飛び跳ねるように彼はぼくらを追いかけてきた。

さらに登ると水呑み杉なる巨木があった。この杉の根から水が湧いているのでこのような名が着けられたが、今では水は枯れてしまっていた。下のほうから婦人たちの話す声が次第に大きくなってきたのでぼくらは再び登り始めた。

霧雨が降り始め、扇山の頂上に着いたときには10数メートル先は見えなくなった。ぼくと向山 氏が並んで歩いたが、先を行く二人の姿は霧の中に消えた。向山氏は、日本語でもこのような状態を朧(おぼろ)と言うのかとぼくに聞いたがぼくの日本語知識も朧で、定かな答えはできなかったが、おそらく霞むと言うのだと解説した。頂上には三角点があり、木製掲示板の地図は枠を残して風で飛ばされたかなくなっていた。まだ11時半で、昼食は次に登る百蔵山の途中という こととなった。しかしこれは幸運な決断であった。

頂上でしばらく休んで、来た道を下っていると、くだんの婦人たちが登ってきた。霧に紛れてぼくらがおとなしくしていると、もう降りているのか、などと話しかけてきた。これから百蔵山のほうに行きますというと、健脚だねと、うらやんでいる様子だった。もし山頂で昼食をしていたら彼女らに同席されていたろう、そしてご馳走攻めにあい、山廃酒なども呑まされやがていい気持ちになって寝そべる、そのうちに彼女らは姿を変え鬼に変化する・・・。「昨日もここを登った」というのは怪しい、ここに住んでいる者ということだろう。黒塚や紅葉狩などの山婆伝説はフィクションであろうが、このような一行に巡り会うと伝説制作者の気持ちもわかる。

次に登った百蔵山も霧の中であった。石田氏の話では扇山も百蔵山も同じくらいの高さでいずれもこんもりとして均整のとれた美しい形をしているという。ほとんど人がおらず、アカゲラが木をつつく音が聞こえる以外は、静寂に包まれたひっそりとした山だ。山から山に行くのに、急な坂を下り急な坂をまた登った。特に急峻な下り坂は爪先に負担が大きい。石田氏は今までの登山経験で四・五回は足爪を割ったということだ。ぼくは会社のビルで下りの練習は丹念に積み重ねて下りに使う足の筋肉には特に自信はあったが、ここのは勾配がきつく、大抵の山下りでは経験しないことだが、あとで足に筋肉痛を覚えた。しかし急峻な登りは、木立が多くこれらを握りながら進んだので、加えて途中で昼食休憩も入ったので、それほど苦ではなかった。

扇山と百蔵山のどちらの山も頂上は広くなだらかに脈打っている感じだった。霧のベールに包まれたこれら二つの山を歩いていてぼくらは何か女性的な上品さ、やわらかさを感じた。

百蔵山途中での昼食では、ぼくは一つの鍋で自分用のインスタント・ラーメンを調理し、もう一つの鍋でコンビニで買ったミートボールをたくさん鍋で温めみんなに配った。ささやかな鍋料理であった。百蔵山頂上では石田氏のコーヒーブレイクがあり、ぼくはリコーダーで午後の静寂にアクセントをつけた。

もうぼくらはこのメンバーでこれらの山を登ることはあるまい。しかし、これから何度このメンバーでこの登山を本多氏の居酒屋で繰り返し語ることだろうか。

百蔵山から、猿橋駅まで歩いて下った。山の裾野では春の花がさまざまに咲いていてぼくらの目 を楽しませてくれた。裾野から岩殿山を見ると、富嶽百景に出てくる山を連想させられた。

日本三奇橋の一つ猿橋を訪ねる予定であったが、ぼくは新宿でリコーダー・アンサンブルのレッスンがあったし、高所恐怖症のため橋が苦手の本多氏も遠慮したので、結局みんな一緒の電車で帰路についた。

おわり

写真(photos):

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro